

(様式6-A)

中澤 祐子 氏から学位申請のため提出された論文の審査要旨

題 目

The pathological complete response and secreted protein acidic and rich in cysteine expression in patients with breast cancer receiving neoadjuvant nab-paclitaxel chemotherapy

(nab-paclitaxelを用いた乳癌の術前化学療法における病理学的完全奏効とSPARC発現)

Oncology Letters (in press)

Yuko Nakazawa, Seshiru Nakazawa, Sasagu Kurozumi, Misato Ogino, Yukio Koibuchi, Hiroki Odawara, Tetsunari Oyama, Jun Horiguchi, Takaaki Fujii, Ken Shirabe

論文の要旨及び判定理由

乳癌治療において術前化学療法は有用で、術前化学療法にて病理学的完全奏効（pCR）が得られることは、生存率を改善し予後予測因子となる。SPARCは細胞増殖や細胞の運動など細胞機能の調整に関わっているアルブミン結合糖タンパクで、SPARCの過剰発現は様々な癌腫において予後因子となることが知られているが、乳癌における治療効果予測因子としてのSPARCの役割についてはまだ明らかではない。本研究では、SPARC発現がアルブミン結合タキサン、nab-paclitaxel（nab-PTX）の乳癌に対する治療効果に影響があると仮説を立て、nab-PTXを含む術前化学療法における治療効果予測因子としてのSPARCの役割について検討した。乳癌におけるSPARC mRNAの高発現は、nab-PTXを含む術前化学療法におけるnon-pCRの予測因子であった。本研究により、乳癌治療開始前の針生検においてSPARC mRNAを評価することで、nab-PTXの治療効果を予測することができると考えられ、術前化学療法の治療選択に有用であることが示された。今後の臨床応用ならびに更なる研究の発展に寄与すると考えられ、博士（医学）の学位に値するものと判定した。

(令和2年2月12日)

審査委員

主査	群馬大学教授（医学系研究科） 消化管外科学分野担任	佐 伯 浩 司 印
副査	群馬大学教授（医学系研究科） 耳鼻咽喉科・頭頸部外科学分野担任	近 松 一 朗 印
副査	群馬大学教授（医学系研究科） 臨床薬理学分野担任	山 本 康 次 郎 印

参考論文

- Relationship Between FDG Uptake and Neutrophil/Lymphocyte Ratio in Patients with Invasive Ductal Breast Cancer.** (浸潤性乳管癌におけるFDG集積と好中球/リンパ球比の関係性) Anticancer Res. 2018 Aug;38(8):4927-4931.
Fujii T, Yanai K, Tokuda S, Nakazawa Y, Kurozumi S, Obayashi S, Yajima R, Hirakata T, Shirabe K.
- Clinicopathological Features of Ductal Carcinoma In Situ from 18F-FDG-PET Findings.** (FDG-PETで発見された非浸潤性乳管癌の臨床病理学的特徴) Anticancer Res. 2017 Sep;37(9):5053-5056.
Fujii T, Yanai K, Tokuda S, Nakazawa Y, Kurozumi S, Obayashi S, Yajima R, Hirakata T, Kuwano H.

（様式6, 2頁目）

最終試験の結果の要旨

乳癌における術前化学療法について および SPARCの発現とその臨床的意義について試問し満足すべき解答を得た。

（令和2年2月12日）

試験委員

群馬大学教授（医学系研究科）

病理診断学分野担任

小 山 徹 也 印

群馬大学教授（医学系研究科）

耳鼻咽喉科・頭頸部外科学分野担任

近 松 一 朗 印

試験科目

主専攻分野 病理診断学 A

副専攻分野 耳鼻咽喉科・頭頸部外科学 A